

---

# Princess

sarsha

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P r i n c e s s

### 【Nコード】

N 5 9 4 6 0

### 【作者名】

s a r s h a

### 【あらすじ】

あるところに、それは美しいお姫様がいました。そのお姫様は塀に囲まれたお屋敷で、大切に、大切に、守られて暮らしていました。そして、そのお姫様は、いつでもこう思っていたのです。誰にでも幸せになるチャンスがある。素敵な王子様と、恋に落ちたその瞬間から、本物のプリンセスになれる と

## 第1話 事の始まり

「だから？」

「だから、って？」

「…だから！どうして欲しいのか仰って下さい！」

朝からお屋敷の中は忙しかった。メイドたちはオロオロと屋敷中を走り回り、この事態をどうしようか悩まされていた。その原因とというのがこのお屋敷の王女にあった。

「そんな…今言ったありのままよ。ねえ、あなた」

「ああ、そのままだ」

朝食のテーブルの反対側に座っている国王と王妃はにこやかに微笑みながら朝食を口に運んだ。国王たちとは裏腹に暗い表情をしていたのは、この国の王女であるアウラ王女だった。ため息を吐きながら、ゆっくりと朝食を食べ始めた。控えているメイドたちも、依然落ち着きなく立って見ていた。

舞台はある時代のヨーロッパ。その中で、とても小さな国が、争いもなく平和な暮らしを送っていた。その国こそ、ここ、シャルテッド王国。

他の国に比べたら、決して裕福であるとは言えなかった。しかし、自然と人の温かさだけは、どの国にも劣っていなかった。国の真ん

中に建っているのが、シャルテッド王国の王家のお屋敷グレインティード城である。国王の娘、アウラは来月で18歳の誕生日を迎える。アウラがお屋敷の外に出ることは滅多になく、教養は全て世話係が行ってきた。たとえキレイに着飾ったって、いくらお作法が良くたって、常に独りぼっちだった。

「来月は王女様のお誕生日の式典がございます。そこには近隣の王国から王女様とお年の近い王子様が何人か出席されます故、今朝、国王様と王妃様が仰られていたように」

「要は、その中から結婚相手を選べと言いたいのでしょ、エリーヌ？」

アウラの自室では、メイドたちがアウラの着替えの手伝いをし、世話係のエリーヌが来月に控えた誕生式典の概要を説明していた。アウラは美しいドレスに着替え終わると、エリーヌと向かい合い、姿勢を正して立った。

「仰る通りでございます、アウラ王女様」

「お父様もお母様もそう言えばいいものを。好意を持った殿方を1人選びなさい、だなんて、まわりくどい言い方」

アウラは部屋から出ると、大広間へと向かった。その後ろからはエリーヌを先頭として数名のメイドが付いて来た。どこに行くにしても、必ずエリーヌとメイドたちが付いて来る。アウラはそれが嫌でしょうがなかった。自由な時間や、息抜きできる時間など数分も無い。あると言えば、寝ているときだろうか。

大広間に着くと、扉の前に立っていた2人の執事がゆっくりと扉

を開け、深々とお辞儀をした。

「…ありがとう」

2人の真ん中で一旦立ち止まると、アウラは礼の言葉を述べた。大広間に入ると、そこにはすでに十数名の弦楽団が揃っていた。それを見たアウラは横目でエリーヌを見て言った。

「エリーヌ、早く始めましょう」

「わかりました。それでは、まずステップの確認から行いましょう」

数日前から、式典に向けてのワルツのレッスンが日課になった。ワルツを踊る時は必ず着替えて行った。朝食の後に毎日2時間。式典まで毎日レッスンが行われた。その間、エリーヌは大広間の片隅でその様子をじっと見守っていた。キレイなワルツの音色に乗り、ステップを覚えることなど、アウラにとっては簡単なことだった。

「アウラ王女様、今日は、今から中庭の方へお散歩に出かけてはいかがでしょうか。お天気も素晴らしいですし」

ワルツのレッスンが終わると同時に、エリーヌが提案した。アウラは大広間の窓から外を眺めた。

「…そうね。けれど、たまには塀の向こう側にも行ってみたいわ」

「アウラ王女様っ…」

何気なく言ったアウラの一言に、エリー又は困ったように反応した。

「わかってるわ。私は鳥かごの中の鳥。大人しくしていればいいのよ」

アウラはそう言うと、大広間を出て自室へと向かった。その後が続いて、やはりメイドたちが付いて行った。今回エリー又だけはその場に留まり、弦楽団と当日の打ち合わせをした。

「アウラ王女様の誕生式典？」

シャルレット王国の隣の国ルーン国では、1人の王子が、アウラの誕生式典が来月催されることを知らされていた。王宮の中庭で剣の練習をしているところに、執事が文書を持ってやって来たのだ。王子は動きを止めずに、剣の素振りしながら執事の話聞いていた。

「はい。何でも、18歳になられるアウラ王女の誕生を祝うとともに……」

「婚約相手を探すだけでも書いてあるか？」

執事が言葉に詰まっていると、王子が代わりに何気なく言ってみた。その言葉を聞くと、執事はふと王子の顔を見た。執事は黙って文書をしまつと、咳払いをした。

「アレ？本当に？…適当に言っただけなんだけど」

王子は剣を腰にしまうと、王宮の中に入って行った。その後を慌てて執事が追いかけた。

「ど、どうなさいますか？」

王子は急に立ち止り、踵を返して執事に向き合つと、指差して言った。

「どうするも何も、会ったこともないような人を祝っているほど僕に暇はない。よって、お断りだ」

「しかし…！」

「悪いが、僕はどこか遠くの戦地に送られたとでも言つて丁重にお断りしておいてくれ、クリス君」

そう言つと王子は自分の部屋の中に入ってしまつた。クリスはドアが閉められているのもお構いなしに深くお辞儀をして答えた。

「仰せの通りに…ルイス王子」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5946o/>

---

Princess

2010年11月2日11時58分発行